

# へ移住 消滅 解消 空洞 学生 移住 集団

神戸市中央区と兵庫区にまたがる入江地区（東川崎町、東出町、西出町）。市場や路地が残る下町は、阪神・淡路大震災や高齢化の影響で空洞化に歯止めがかからないが、大学生がその町への移住を計画している。神戸芸術工科大学の学生が始めた「住みコミュニケーション・プロジェクト」で、新しい町づくりの手法として注目されている。  
（木村信行）

発案したのは同大大学院生 査したり、アートイベン院生の三宗匠さん(三)。トを開くなどしてきた。同大と入江地区の交流は 油のしみた鉄工所、ス五年目で、授業の一環と ギの木の電柱、お好み焼して町の文化や景観を調きのにおいて、ネコが集ま



「この土台、なかなか外れんなあ」。大学生と商店主の協力で進む改装作業—神戸市兵庫区西出町、稲荷市場

## 神戸芸工大生が計画

空き地…。町にほれ込んだ三宗さんが「一過性のつながりではなく、土着しよう」と呼びかける。希望者が殺到。まず十人を入居者として登録し、年内に五人が移住することになった。最初の「定住地」に選

んだのは稲荷市場。一九七〇年代のピーク時には九十店舗でにぎわったが、震災で全壊するなどし、現在は約二十五店舗。シャッターを閉めた店舗跡を木工製品を作る工房などに改装し、二階に学生が住み込む。このほか

二軒の改装も進む。プロジェクトの柱は二つ。一つは「住み込みシステム」づくりだ。不動産屋に登録していない町の空き物件を探し、家主と交渉。自由に改装でき、▽犬の散歩を手伝う▽月一回は高齢の家主と食事をする—などユニークな条件を個別に決める。大学のホームページに掲載。学生が自由に閲覧できるようにし、家主と希望が合えば入居する。

もう一つは「地域活動への参加」。近くの商店で積極的に食事や買い物をして町のイベントには企画段階から参加し、学生のネットワークで広報活動も手伝う。また、空き物件の有効活用と改装で古い建物の保存、再生にもつなげる。

五月末に入居する大学院生の与那嶺ゆずさん(三)は「地域の人が笑顔で迎えてくれる。学生街にはないつながりが楽しい」。同市場でせんべい屋を営む大畑守人さん(六)は「高齢化が進み、このままではじり貧になる。若者がいるだけで活気づく」と期待する。

三宗さんは「学生は卒業すると町を離れるが、新しい学生にも呼びかけ、継続的に住み込める仕組みを作りたい」と話している。

査したり、アートイベン院生の三宗匠さん(三)。トを開くなどしてきた。同大と入江地区の交流は 油のしみた鉄工所、ス五年目で、授業の一環と ギの木の電柱、お好み焼して町の文化や景観を調きのにおいて、ネコが集ま